

## 二重格語尾が含まれるモンゴル語の日本語訳に見られる特徴

ゴ スチンゴワ

### 1. はじめに

本稿では、中国内モンゴル自治区<sup>1</sup>におけるモンゴル語を母語とする日本語学習者<sup>2</sup>が属格語尾を基本とする二重格語尾が含まれるモンゴル語の文を、どのように翻訳しているかについて考察する。現代モンゴル語には7つの基本的な格助詞があり、主格以外の格助詞にはそれぞれ格語尾がある。具体的にモンゴル語の主格はゼロ語尾である。即ち主格を表す本来の語尾は存在しないが日本語の格助詞「が」「の」「に」「で」「を」と対応させられる。モンゴル語の属格には「*ᠠᠨ*」「*ᠠᠨ*」「*ᠡ*」という三つの格語尾があり、「が」「の」「に」に対応する。対格には「*ᠦ*」「*ᠦ*」という二つの格語尾があり、「が」「を」に対応する。与位格には「*ᠦ*」「*ᠦ*」という二つの格語尾があり、「が」「に」「で」「を」「へ」に対応する。奪格には「*ᠠᠨ*」という一つの格語尾があり、「が」「に」「で」「を」「より」「から」に対応する。造格は「*ᠡ*」「*ᠡ*」という二つの格語尾があり、「が」「に」「で」「を」に対応する。また共同格は「*ᠡ*」という一つの格語尾があり、「に」「と」に対応する。しかし、モンゴル語の格助詞は日本語の格助詞と異なり、二つの異なった格語尾を重ねて用いる場合があり、これは二重格語尾と呼ばれる。フフバートル (1993) は二重格語尾として属格語尾 *ᠠᠨ* yin、*ᠠᠨ* un/ün、*ᠡ* u/ü+与位格語尾 *ᠦ* du/dü、*ᠦ* tu/tü および属格語尾 *ᠠᠨ* yin、*ᠠᠨ* un/ün、*ᠡ* u/ü+共同格語尾 *ᠡ* tai/tei[tai,tai,tei] tai/tei を挙げ、例えば次のような用例が見られるとする。

(1) 先生のところへ行く。

これをモンゴルに翻訳すると「*ᠰᠠᠮᠤ ᠠᠨ ᠡ ᠦ ᠲᠤᠨᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤᠨ*」となる。ここでは属格語尾の「*ᠠᠨ*」と与位格語尾の「*ᠦ*」が重ねて使われていることが分かる。

(2) その人のと同じものを買おう。

これをモンゴル語に翻訳すと「*ᠰᠤᠮᠤ ᠡ ᠡ ᠦ ᠲᠤᠨᠭᠤᠯᠤᠯᠤᠰᠤᠨ*」になる。この文では属格語尾「*ᠡ*」と共同格語尾「*ᠡ*」が二重格語尾を形成している。

以上、(1)と(2)のモンゴル語の翻訳文のように、モンゴル語では二種類の格語尾を重ねて使うことのできるケースがしばしばみられる。しかし、浅川・竹部 (2014) では、日本語の助詞分類の基礎となる助詞相互の承接に関する原則の一つとして、格助詞と格助詞とは重ならないと記述しており、その理由として、格助詞は体言または体言に準ずる語を承けて下の語との関係を表す助詞なので、格助詞どうしが重なることができないと説明している。そこで、内モンゴル自治区の日本語学習者は二重格語尾が含まれるモンゴル語の文を日本語に翻訳するに際して二重格語尾をどのように翻

<sup>1</sup> 以下、内モンゴル自治区という。

<sup>2</sup> 本稿で参考にした先行研究では調査対象者は同じモンゴル語母語話者でもモンゴル人学習者、またはモンゴル人日本語学習者と使われている場合がある。しかし、本稿ではモンゴル語を母語とする日本語学習者と統一する。



共同格語尾を基本とするものは属格を基本とするものと比べると多くないため、本稿では属格語尾を基本とした6種類の二重格語尾のみを扱うことにする。モンゴル語の属格語尾には3つの格語尾があり、語幹によって使い分けされる。清格爾泰(1991)は、属格語尾は所有、性質、部分、原材料、容器、時点、場所、設立主体、固有の名称、動作主、範囲を表すと述べている。

### 3. 先行研究

#### 3.1 日本語とモンゴル語の助詞に関する対照研究

日本語とモンゴル語の対照研究では小沢重男(1997)、賽罕烏其拉圖・塔娜(2013)、エルデネビレグ ウヤンガ(2009)、フフバートル(1993)などが挙げられる。

小沢(1997)では、モンゴル語の格助詞の接続方法や用法について記述があるが、二重格語尾に関する言及はない。

賽罕烏其拉圖・塔娜(2013)では、日本語の格助詞の用法について記述がある。特に、それぞれの格助詞の用法ごとに例文を添えてモンゴル語訳をつけて説明しているため、日本語の格助詞とモンゴル語の格語尾の対応関係を具体的な用例を通して理解することができる。

エルデネビレグ ウヤンガ(2009)は日本語とモンゴル語の格関係の対照という観点から、主に格助詞「を」「に」「で」がモンゴル語のどの格語尾と対応しているかについて明らかにした。

フフバートル(1993)はモンゴル語の基礎文法書であり、モンゴル語の二重格語尾についてモンゴル語には格語尾が二つ重なる場合があると述べている。なかでもよく使われるのは属格語尾+与位格語尾および共同格語尾であると指摘する。しかし、二重格語尾の分類までは踏みこんでいない。

#### 3.2 習得に関する先行研究

格助詞の誤用についての研究としては小林幸江(1983)、スヘバートル・サインザヤ(2004)が挙げられる。

小林(1983)は、モンゴル語を母語とする日本語学習者の代表的格助詞の使用に際して生じる誤用を、事例を挙げて説明した。

スヘバートル・サインザヤ(2004)は、モンゴル語を母語とする日本語学習者が助詞「に」「で」の場所を表す用法と「を」の対象を示す用法においてよく誤用を起こすことを明らかにした。しかし、誤用の原因は明らかにしていない。

#### 3.3 本研究の位置づけ

先行研究では日蒙両言語の助詞の比較研究や日本語学習者の助詞の習得について、モンゴル語を母語とする日本語学習者の助詞に関する誤用およびモンゴル語の格語尾を部分的あるいは全体的にとりあげ、日本語の格助詞との比較対照研究を行ってきた。しかし、日本語とモンゴル語の助詞は1対1対応を見せるものもあるが、日本語は二

重格語尾を持たない。そのため、二重格語尾を含むモンゴル語を日本語に翻訳する際に誤用がしばしば生じる。日本語学習においては特に意識して、正しい解釈や訳語を模索する必要があり、また指導における方法論を確立する要請が高くなると考えられる。

#### 4. 研究目的

本稿では以下の二つの問題を明らかにすることを目的とする。

- ① モンゴル語の属格語尾を基本とする二重格語尾を学習者が実際にどのように翻訳しているのか。
- ② 翻訳の特徴からこのように翻訳している原因を明らかにする。

#### 5. 研究方法及び調査対象者

2019年6月7日から2019年6月27日までの20日間にわたり、属格語尾を基本とする6種類の二重格語尾それぞれにつき3つのモンゴル語の文、計18の文を作成し、モンゴル語を母語とする2名の大学教員にモンゴル語のチェックを依頼した。そのうえで、それら18の文をランダムに並べ替え、内モンゴル自治区の大学で日本語を専攻とする20名のモンゴル語を母語とする日本語学習者<sup>5</sup>に翻訳してもらった。また、モンゴル語を母語とする日本語学習者の出身地、母語以外に使用できる言語および、生活言語について回答してもらった。収集したデータを日本語の翻訳文の中からモンゴル語の二重格語尾の翻訳にあたる部分を取り出し、それから、モンゴル語を母語とする日本語学習者が翻訳している事例の形を基に分類した。

#### 6. 調査結果

##### 6.1 属格語尾+対格語尾 (ᠶ᠋ᠠᠨ) の調査結果

まず、属格語尾+対格語尾 (ᠶ᠋ᠠᠨ) に当てられた訳語を頻度順にみると、「のも」と翻訳しているのが22例、「のを」と翻訳している用例は12例。「の本も」が7例、「を」が5例、「から」が3例、「と」が2例、「のものを」と「のと」がそれぞれ2例みられた。また「の家から」、「᠊」、「をも」「の」「の本を」と翻訳している例がそれぞれ1例であった(図1参照)。このように「助詞+助詞」で翻訳されている例が最も多かった。

##### 6.2 属格語尾+与位格語尾 (ᠨᠠᠭ) の調査結果

次に、属格語尾+与位格語尾 (ᠨᠠᠭ) の訳例を見ると、60例中43例が「の家に」という訳語をあてており、60の訳例のうち43例。そのほかの訳例としては「へ」が4例、「の家へ」、「の家から」、「のへ」がそれぞれ2例、「のに」「へに」「家へ」「᠊」「家

<sup>5</sup> なお、これらの学生のうち、15名が日本語能力試験2級 (JLPT N2) の合格者、5名が日本語能力試験1級 (JLPT N1) の合格者である。

に」「の家で」「ので」がそれぞれ1例であった(図2参照)。ここでは、「助詞+名詞+助詞」の形式で翻訳されている例が最も多かった。

### 6.3 属格語尾+与位格語尾(ᠶᠡᠨ)の調査結果

3つ目に、属格語尾+与位格語尾(ᠶᠡᠨ)の訳例を見ると「の家に」と訳されているものが32例と最も多い。それに次いで「の家から」と訳されている例が10例、「へ」および「に」が4例であった。「の家へ」、「のへ」としたものがそれぞれ2例。「のどこへ」、「のところに」、「へに」、「の家」、「φ」、「から」としたものも1例ずつ見られた(図3参照)。図3からは「助詞+名詞+助詞」で翻訳されている例が最も多かったことが分かる。

### 6.4 属格語尾+奪格(ᠶᠡᠮ)の調査結果

4つ目は、属格語尾+奪格(ᠶᠡᠮ)「の家から」の形式で翻訳しているものが最も多く18例、それに次いで「から」としたものが13例、「のから」が8例であった。そのほか「より」が6例、「のより」が5例で、「の服より」が5例見られた。そのほか、「家から」「の家に」「の自転車で」「φ」「のサイズより」のように翻訳されている例はそれぞれ1例であった(図4参照)。図4からは翻訳されるばらつきが多いことが分かる。

### 6.5 属格語尾+造格語尾(ᠶᠡᠨᠠᠵᠢ)の調査結果

5つ目は、属格語尾+造格語尾(ᠶᠡᠨᠠᠵᠢ)の訳例を見ると「の家に」が37例で最も多く、「ので」が5例、「に」、「の家から」がそれぞれ3例、「のへ」、「へ」、「の家へ」がそれぞれ2例、そのほかにも、「から」「の家を」「のところに」「のも」「のから」「へも」がそれぞれ1例見られた(図5参照)。図5では「助詞+名詞+助詞」で翻訳されている例が最も多かった。

### 6.6 属格語尾+共同格語尾(ᠶᠡᠨᠠᠵᠢ)の調査結果

最後に、属格語尾+共同格語尾(ᠶᠡᠨᠠᠵᠢ)の訳例をみると「のと」が17例、「のも」が18例と拮抗している。「と」が7例、「を共に」が3例、その他は、「の分と」、「の分も」、「の本と」がそれぞれ2例、また「から」、「との」、「の」、「に」、「のまで」、「を」、「の本も」「の本を」「φ」がそれぞれ1例見られた(図6参照)。図6では、「のと」「のも」のように「助詞+助詞」で翻訳されている例が最も多かった。

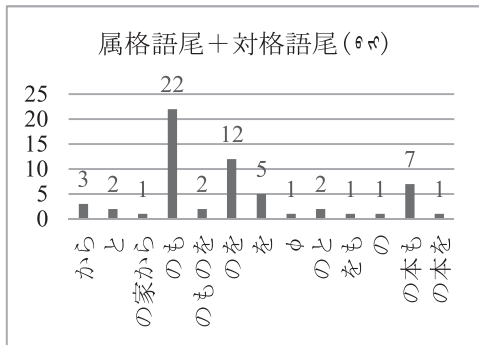


図1 属格語尾+対格語尾(㊦㊧)の組み合わせ

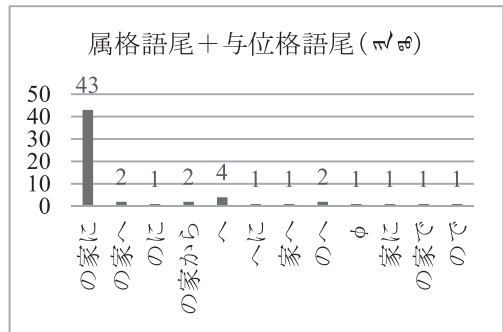


図2 属格語尾+与位格語尾(㊦㊨)の組み合わせ

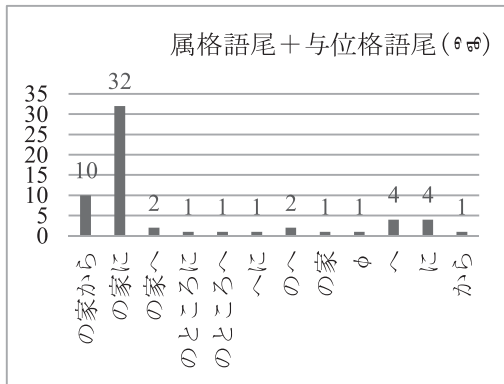


図3 属格語尾+与位格語尾(㊦㊩)の組み合わせ

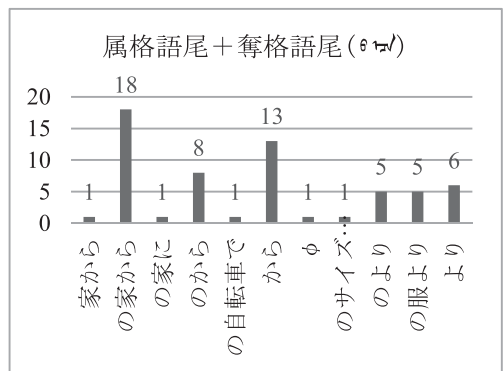


図4 属格語尾+尊格(㊦㊪)の組み合わせ

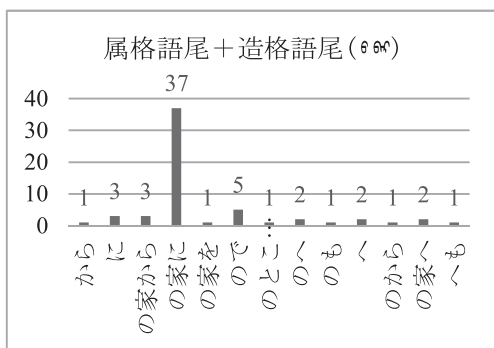


図5 属格語尾+造格語尾(㊦㊫)の組み合わせ

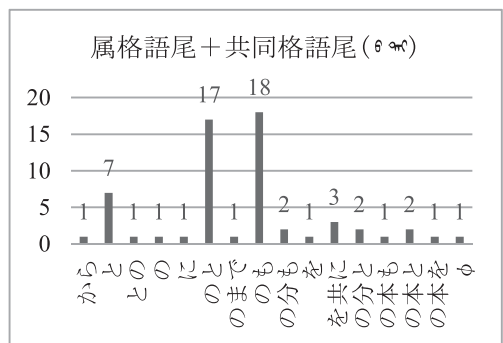


図6 属格語尾+共同格語尾(㊦㊬)の組み合わせ

### 6.7 属格語尾を基本とした6種類の二重格語尾の調査結果の分類

上の調査で得られた日本語訳例を品詞の構成に一般化して整理すると、次の表1のようになる。

表1 属格語尾を基本とした6種類の二重格語尾の調査結果の分類

二重格語尾の分類 (用例数) 翻訳結果 の分類	属格語尾+対格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)	属格語尾+与位格語尾 (ᠠᠨᠠᠭᠤ)	属格語尾+与位格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)	属格語尾+奪格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)	属格語尾+造格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)	属格語尾+共同格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)	合計
① 助詞+名詞	0	0	1	0	0	0	1
② 名詞+助詞	0	2	0	1	0	0	3
③ 助詞+名詞+助詞	11	48	46	26	44	11	186
④ 助詞+助詞	37	5	3	13	10	37	105
⑤ 助詞	11	4	9	19	6	11	60
⑥ φ	1	1	1	1	0	1	5

用例数は10例以上のものを太字にした。

表1では6種類の属格語尾を基本とする二重格語尾が実際に訳されている結果を示す。この表から、属格語尾+与位格語尾 (ᠠᠨᠠᠭᠤ)、属格語尾+与位格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)、属格語尾+奪格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)、属格語尾+造格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ) の四種類は「助詞+名詞+助詞」の形で多く翻訳されており、属格語尾+対格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ)、属格語尾+共同格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ) の二種類は「助詞+助詞」の形で多く翻訳されていることが分かる。また、属格語尾+奪格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ) の翻訳は残りの5種類の二重格語尾の組み合わせと比べるとばらつきが見られた。二重格語尾の種類ごとに見ると以下の通りである。

表1から属格語尾+対格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ) の組み合わせを、モンゴル語を母語とする日本語学習者は四つの形式で翻訳していることが分かる。最も多い形式は「助詞+助詞」の形であり、合計60例のうち37であった。その次に、「助詞」と「助詞+名詞+助詞」がそれぞれ11例、「φ」が1例であった。「助詞+名詞」と「名詞+助詞」で訳された例はなかった。

次に、属格語尾+与位格語尾 (ᠠᠨᠠᠭᠤ) は「助詞+名詞+助詞」の形で最も多く翻訳されており、48例であった。また「名詞+助詞」が2例、「助詞+助詞」が5例、「助詞」が4例、「φ」が1例であり、「助詞+名詞」で翻訳された例は見られなかった。

また、属格語尾+与位格語尾 (ᠶᠢᠰᠦ) の訳例で最も多く見られた形式は「助詞+名詞+助詞」の形式で、46例と圧倒的に多い。次に、「助詞」が9例、「助詞+名詞」が1例、「助詞+助詞」が3例みられ、「φ」の形式で翻訳しているのも1例あった。



続いて属格語尾+奪格 (ᠶᠢᠨ) の訳例を見ると、「助詞+名詞+助詞」の形で最も多く、26例であった。これ続いて多いのが「助詞」の形式で、19例見られた、「助詞+助詞」の形式で翻訳された用例も13例あった。そのほか、「名詞+助詞」、「᠊」がそれぞれ1例であった。「助詞+名詞」の形では翻訳されたものはなかった。

5つ目として、属格語尾+造格語尾 (ᠶᠢᠨ) の訳例を見ると「助詞+名詞+助詞」の形で最も多く翻訳され、44例であった。その次に、「助詞+助詞」の形で翻訳されている例が10例、「助詞」の形式で翻訳された例は6例あり、「助詞+名詞」、「名詞+助詞」、「᠊」の形式では翻訳されたものはなかった。

最後に、属格語尾+共同格語尾 (ᠶᠢᠨ) についてみると、属格語尾+対格語尾の訳例と同様大別して三つの形で翻訳されていることが分かる。すなわち、「助詞+助詞」が最も多い、37例、次いで「助詞」の形が12例であり、「助詞+名詞+助詞」が11例、「᠊」が1例であった。

以上の表1からはモンゴル語の二重格語尾を日本語に翻訳するとき形式面でどのような特徴があるかについて明らかにするために次の考察を行う。

## 7. 考察

これまで、モンゴル語の属格語尾を基本とした二重格語尾を中心に、モンゴル語を母語とする日本語学習者の翻訳の特徴を、六種類に分類して分析した。翻訳している形式別に特徴が見られたので、以下で考察を行う。

### 7.1 「助詞+名詞」の形式

まず、属格語尾を基本とした二重格語尾が「助詞+名詞」の形式で翻訳されている例は1つしかなかった。それは、次に示す調査文1の学習者11による翻訳である。

調査文1: *ᠠᠨ ᠲᠤᠨᠠᠵᠢ ᠶᠢᠨ ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ ᠠᠨᠠᠨᠠᠨ*

模範的な訳文: 私 田中さんの 家 に 自転車 で 行って きた。

学習者11の翻訳: 私は田中の家自転車で行ってきた。

ここでは二重格語尾「*ᠶᠢᠨ*」が「助詞+名詞」の形で翻訳していることが確認できる。しかし、学習者11の翻訳した日本語の文は不自然で、「家」の次に「に」が一つ欠けていることが確認できる。内モンゴル自治区におけるモンゴル語を母語とする日本語学習者が中国語もできるため、学習者11の母語であるモンゴル語のほか中国語の影響があるかについて確認した。学習者の言語形成を訪ねたところ、中学校までは中国語よりモンゴル語が多く使われており、高校から今までは中国語を多く使うようになったという。調査文1を中国語に翻訳すると、「我骑自行车去了田中家。」になる。

中国語の翻訳文からは「田中さんの家」の箇所を「田中家」で翻訳され、中国語には方向を表す格助詞「に」の脱落が確認できる。そのため、学習者11の翻訳文からは中国語にも影響されていると考えられる。この結果は小林(1983)の研究結果と一



致している。

## 7.2 「名詞+助詞」の形式

「属格語尾を基本とするモンゴル語の二重格語尾は、上の調査結果からもわかるように「属格語尾+与位格語尾」と「属格語尾+奪格語尾」の二つであり、実例の数は3例である。

調査文 8 :  $\text{ᠵᠢᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ}$

模範的な訳文：昨日 スチン の 家 に 行きました。

学習者 3 : 昨日スチン家へ行きました。

調査文 14 :  $\text{ᠵᠢᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠯᠤᠰ}$

模範的な訳文：先月 スチン の ところ に 行って 一周間 に なって来た。

学習者 14 : 先月スチンさん家に行って一周間泊まってきた。

調査文 8 と調査文 14 ではモンゴル語の文は「昨日スチンさんのいるところに行きました。」という文であり、学習者は翻訳する際に「スチンさんの家に行きました」と翻訳するものを「スチン家」または「スチンさん家」と翻訳している。つまり、所属を表す「の」が省略されていることである。「の」格が省略されている理由として、まず、調査文 8 を中国語に翻訳すると「昨天去了斯琴家」になる。中国語では「スチンの家」を「斯琴家」或いは「斯琴的家」のどちらでも可能である。そのため、中国語に影響された可能性が高いと考えられる。

## 7.3 「助詞+名詞+助詞」の形式

続いて、属格語尾を基本とした二重格語尾「助詞+名詞+助詞」の形で最も多く翻訳されていることが確認できる。主にどのように翻訳しているかについてまとめると、下の表 2 のようになる。

表 2 「助詞+名詞+助詞」で翻訳された実例

属格語尾を基本とした二重格語尾	「助詞+名詞+助詞」の形で翻訳された実例
①属格語尾+対格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の家から・のものを・の本も・の本を
②属格語尾+与位格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の家から・の家に・の家へ・の家で
③属格語尾+与位格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の家から・の家に・の家へ・のところに・のところへ
④属格語尾+奪格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の家から・の家に・のサイズより・の服より、の自転車で
⑤属格語尾+造格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の家から・の家に・の家を・のところに・の家へ
⑥属格語尾+共同格語尾 (ᠤᠯᠤᠰ)	の分と・の本も・の本と・の本を・を共に

表 2 によると、⑥属格語尾+共同格語尾の訳例に見られる「を共に」のほかは、すべて「(所属・所有の意味を表す)の+名詞+助詞」の形で訳されていることが分かる。



語を母語とする日本語学習者はその点を認識しない、たまたま準体助詞の「の」と解される「の」を訳語に採用し、結果として正しい翻訳を導いているという場合が少なくないのである。

このように、モンゴル語の二重格語尾は文脈によって、「助詞+助詞」の形式で翻訳されるものもあれば、直接翻訳されないものもある。そのため、どのような場合に「助詞+助詞」の形式で翻訳されて、どのような場合に翻訳されないかについてさらに検討する必要があると思われる。

## 7.5 「助詞」の形式

調査文 4 :  $\text{би стэн / 6 н нхэн нхэн}$  ..

模範的な訳文：私 スチン の もの を もって 来た。

学習者の翻訳：私はスチンと一緒に来た。(協力者 7)

スチンさんを連れてきた。(協力者 6)

調査文 16 :  $\text{бат нь / нн / нхэнхэн нхэнхэн стэн / 6 нн / нхэнхэн нхэнхэн}$  ..

模範的な訳文：バトさん 本 を 持って来る とき スチン の 本 も 持って来て くれた

学習者の翻訳：バトさんはスチンさんの一緒に持ってきました。(協力者 1)

調査文 4 は学習 6 と協力者 7 はそれぞれ「を」と「と」と翻訳されている。また調査文 16 は「を」と翻訳されている。これら 3 つの訳例はいずれも原文の意味を正しく表していないのであるが、これは学習者がそもそも原文の意味を理解していないことに起因するものと思われる。

調査文 7 :  $\text{хүнийг нь өмнө нь / 6 стэн}$  ..

模範的な訳文：明日 李先生 の 家 に 行きます。

学習者 12 の翻訳：明日李先生へ行きます。

調査文 8 :  $\text{хүнийг нь / 6 6 стэн}$  ..

模範的な訳文：昨日 スチンさん の 家 に 行きました。

学習者 18 の翻訳：昨日スチンへ行きました。

これらの調査文に対する翻訳を見ると、モンゴル語を母語とする日本語学習者は二重格語尾を、方向を表す「へ」と訳している、原文は李先生やスチンさんのいる「場所」、もしくはスチンさんに所属する「家」あるいは「会社」などの場所を表す名詞が含意されているが学習者は翻訳するときはスチンに所属するものを省略していることが確認できる。このように翻訳している理由として、調査文 7、調査文 12 の原文は内モンゴルの地域差により「 $\text{хүнийг нь өмнө 6 стэн}$ 」・「 $\text{хүнийг нь / 6 6 стэн}$ 」と読み書きをする地域もある。つまり、「 $\text{нь / 6}$ 」「 $\text{6 6}$ 」の代わりに方向を表す助詞「 $\text{6 стэн}$ 」を使用している。「 $\text{6 стэн}$ 」は方向を表す機能があるためそのまま、日本語の「へ」で翻訳した可能性があると考えられる。

最後に、学習者 9 による調査文 10 の翻訳と学習者 1 による調査文 15 の翻訳を見る。

調査文 10 :  $\text{стэн / 6 нь / нн / нхэнхэн}$  ..



- エルデネビレグ ウヤンガ (2009) 「日本語とモンゴル語の格関係の対照」『信州大学国語教育学会』19 巻、pp. 1-11.
- 小沢重男 (1997) 『蒙古語文語文法講義』大学書林
- 小林幸江 (1981) 「モンゴル人に対する日本語教育の研究—モンゴル人学生の誤用例を中心に—」『日本語学校論集』8 号、pp. 25-38.
- (1983) 「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析—格助詞に関する誤用について—」『日本語学校論集』10 号、pp. 44-53.
- サレンチモグ・竹寫志起・松本忠博 (2011) 「日本語からモンゴル語への機械翻訳における格助詞の対応について」『言語処理学会』第 17 回年次大会 発表論文集、pp. 392-395.
- スヘバートル・サインザヤ (2004) 「モンゴル人学習者の誤用の原因となる用法ズレ—日本語の格助詞「に」「で」「を」とモンゴル語の格語尾との対応—」『中部言語学会』小泉保先生喜寿記念特記号
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫・益岡隆志・田窪行則 (1988) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版
- フフバートル (1993) 『モンゴル語基礎文法』インターブックス
- (1997) 『続モンゴル語基礎文法』インターブックス
- 山口幸二 (1972) 「日本語の格的表現における諸問題 I」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科) 3 号、pp. 62-101.
- (1978) 「<従属句>に於ける格表現について」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科) 7 号、pp. 43-56.
- (1980) 「モンゴル語の「格」の表現」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科) 9 号、pp. 19-32.
- 李晶 (2000) 「日本語教育における日本語と蒙古語の文法特徴についての一考察」『留学新潟産業大学人文学部紀要』19 号、pp. 109-119.
- (2001) 「日本語教育における日本語と蒙古語の「助詞」の使い方についての一考察」『留学生教育』6 号、pp. 127~138

### 中国語の参考文献(ABCD 順)

- 内蒙古大学蒙古学学院蒙古语文研究所 (2005) 『現代蒙古語』内蒙古人民出版社.
- 青格尔泰 (1999) 『現代蒙古語语法』蒙古語民族出版社.
- 赛罕乌其拉图・塔娜 (2013) 『日本語基礎文法』内蒙古人民出版社.
- 乌兰其其格 (2017) 『蒙古族大学生学习使用日语格助词的研究』民族出版社.
- 援朝・嘎拉桑 (2012) 『蒙古语言学大辞典』辽宁民族出版社.

